

## 兵庫県下で分離された *Salmonella enterica* の抗菌薬耐性動向

◎松本 京佳<sup>1)</sup>、大澤 佳代<sup>2)</sup>、篠宮 成香<sup>1)</sup>、中谷 瑞希<sup>1)</sup>、松本 朋子<sup>1)</sup>、橘 美希<sup>1)</sup>、八木 考洋<sup>1)</sup>、吉田 弘之<sup>1)</sup>  
株式会社 兵庫県臨床検査研究所<sup>1)</sup>、学校法人 神戸常盤大学<sup>2)</sup>

【はじめに】*Salmonella* spp.は毎年多くの発生をみる細菌性食中毒の原因菌の1つである。健康な成人ではその症状は胃腸炎にとどまるが、小児や高齢者ならびにHIV感染者においては敗血症などの重篤な転帰に至ることもある。今回我々は兵庫県下で分離した*S.enterica*の薬剤感受性を測定し、その耐性状況の把握と耐性菌の菌名同定を試みたので報告する。

【対象・方法】2014年から2018年に弊社細菌検査室に臨床材料として提出され分離された*S.enterica*886株のうち薬剤感受性検査の依頼があった350株の中で何れかの薬剤に対して耐性を示した83株について血清型菌名を同定した。方法は、質量分析および生化学性状検査で*S.enterica* subsp *enterica*と同定された株をサルモネラ抗血清（デンカ生研）で菌体抗原（O抗原）および鞭毛抗原（H1、2相（誘導相））の確認し、血清型菌名を同定した。薬剤感受性試験は、CLSIディスク拡散法に準じて行った。

【結果】検討を行った*S.enterica*83株の血清型の内訳はO14群30株、O7群7株、O8群27株、O9群12株、

O13群1株、判定不可6株となり、15の血清型菌名に同定された。薬剤感受性の結果は、テトラサイクリン系の耐性が最も多く65株、次いでペニシリン系26株を認めた。また、キノロン系にも耐性は散見されESBLs産生株も2株確認した。

【考察】非チフス性サルモネラ（NTS）の感染症は腸炎に留まることが多いが、重篤な症状で抗菌薬の治療対象になるケースは少なくはない。近年、牛や豚・鶏などの家畜の飼料への抗菌薬乱用が行われていることから耐性菌の増加が懸念されている。薬剤耐性の動向は治療薬として多く使用されているキノロン系薬に耐性菌も散見されておりESBLs産生株も確認された。薬剤感受性の動向を継続的に調査することは、抗菌薬選択時に必要となるバックグラウンドとしての情報を持ち、また海外で報告されている耐性菌をスクリーニングするためにも今後も必要であると考ええる。また、抗菌薬治療においては薬剤感受性を確認したうえで薬剤選択を行う必要があると思われる。

（連絡先：079-267-1251）